

中学生・高校生の英語使用に対する主観的ニーズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 純也, 亘理, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025371

中学生・高校生の英語使用に対する主観的ニーズ

Subjective needs of high- and junior high-school EFL learners

福田 純也 ・ 亘 理 陽 一

Junya FUKUTA and Yoichi WATARI

（平成 29 年 10 月 2 日受理）

Abstract

本研究は、静岡市内の中学・高校を対象に行ったアンケート調査の自由記述データを分析し、中学生・高校生における英語使用の主観的ニーズを記述することによって、その傾向と変容を探ることが目的である。分析の結果、先行研究と同様、英語を用いたコミュニケーションのニーズはどのような学校種・学年でも見られることが示された。一方で、先行研究の多肢選択アンケートにおいて一貫して認められていた入試にかかわる強い英語ニーズは本分析においては確認されず、生徒は入試を超えた長期的視野に立ち、多様なニーズを持つことが示された。生徒の英語ニーズが内的・外的要因の影響、およびその相互作用によりダイナミックに変化するものであることを示唆し、今後の研究への展望を述べる。

1. 背景

本研究は、静岡大学・信州大学・兵庫教育大学が委託されている文部科学省委託事業「中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法等に関する実証研究」のうち、静岡大学を中心とするプロジェクト（<http://fretss.shizuoka.ac.jp>）に関する報告である。本論の主たる目的は、本事業初年度に静岡市内の中学・高校を対象に行ったアンケート調査の自由記述データを分析し、中学生・高校生における英語使用の主観的ニーズを記述、そしてその傾向と変容（英語習熟度・学年による変化）を探ることである。

近年では英語能力の評価方法として、Can-do Statementsに基づく評価をはじめとする行動志向的な評価方法が導入されつつある。この観点では、言語を用いて何ができるか（can-do）に即して達成目標が設定され、その目標を参照して英語能力判断基準が開発される。このように現実の社会で必要となる言語使用状況を教室内に作り出し、実際に使用する経験を通して英語を学ぶといった方法を採用する際には、学習者がどのような場面でどのような課題を達成する必要があるのか（または必要性を認識しているか）を把握することが極めて重要である。また近年では学習者の多様性といった観点から、地域の「言語的、社会言語的、政治的特異性」を考慮した環境特定の指導の必要性も認識されつつある（Kumaravadivelu, 2001）。この点において、第二言語習得研究などで仮に「普遍的に効果の高い教授法」が特定されたとしても、教員が自身の指導環境において教授法選択などの意思決定を行うにあたり、学習者の外国語使用ニーズを認識する必要性が薄れることはない。

日本における英語学習者の英語使用ニーズにかかわる先行研究としては、寺沢（2015）が挙げられる。寺沢は、ランダム抽出調査の二次分析を通して、日本社会全体にどれだけの英語使用ニーズが浸透しているかという問いを実証的に検討している。ここでは、実際に日常生活や趣味でどれだけ英語を使用しているかを尋ねた項目を分析した結果として、日本社会において英語を実際に使用している人は全体のごく一握りであることが示されている。

寺沢（2015）が行った日本社会における英語使用の分析は、英語学習を行う生徒の側から見れば「将来英語の英語使用」についての傾向を示しているという点で、学習者の「客観的」なニーズを表しているといえる。一方、「主観的」なニーズ——つまり個々人の英語使用に対する主観的な必要感やそれに基づくそれぞれの学習目的——に関する研究は、大学生を対象とした調査は相当数あるものの、中学生・高校生を対象にしたものは限られる。

そのような状況の中で、永倉（2006）は、愛知・石川・富山・静岡県内の中学・高校・大学生および教員2377名（うち1476名が中学生・高校生）を対象に「英語教育の目的」に関して尋ねるアンケート調査を行っている。この調査は、調査者が用意した11の項目に3件法での回答を求めるものであった。分析の結果、英語を使って外国人とコミュニケーションを行う力や、進路希望を実現するために入試で高得点を取る力に対して高い評定をつけることがわかり、これらのニーズが高いことを示した。また静岡大学（2017）では、静岡市内の中学生・高校生を対象としたデータベースのマークシート式アンケート項目の記述統計が示されている。この報告からは、永倉（2006）と同様、英語でコミュニケーションができるようになりたいと答える割合と、大学入試に対応できる力をつけたいと回答する割合が非常に高いことが読み取れる。また、GTECのグレードが高くなるにつれて国際志向性に関連する事項（卒業後国際社会で活躍、海外の大学に進学、海外の高校の授業への参加など）を達成する英語力を身につけたいと感じる傾向が示されているのに対し、グレードが低くなると相対的に、海外旅行などでの日常英会話などに関連する英語力と大学入試に関する選択の割合が増えることが示されている。

上記の研究はいずれも、多肢選択式のアンケート調査の結果である。多肢選択式のアンケートは、事前に調査者が準備した項目に対して相対的な選好性を答えさせるものであり、事前に準備された項目以外の対象者が持つニーズの多様性を描き切れない。この点に関して、本稿に近い焦点を持つ研究として、高校生のみではあるが自由記述項目を分析しニーズの特定を試みた大木（2015）が挙げられる。大木は、白鷗大学足利高等学校の生徒580名の、英語ニーズにかかわるアンケート調査を分析している。分析の結果、高校生のニーズは「英会話スキル」「読み書きのスキル」「言語知識の習得」「テスト・資格好成绩」「Authentic英語の理解」「進路実現レベル」「海外旅行会話」の7つのニーズに分類できるとし、中でも英会話のスキルに関する回答が圧倒的に多いことを特徴として挙げている。また会話能力へのニーズに対する言及の割合に学年・受験予定の有無の差が見られなかったことから、このニーズはそれらの要因にかかわらず持ちうるニーズであることを示唆している。

寺沢（2015）で行われた分析以外のほとんどすべてのニーズ分析はランダム抽出したデータを基にしていない。したがって、例えば日本の高校生全体に一般化するべきではないし、（特にESPにおける）ニーズ分析は特定の地域や教育機関の学習到達目標の決定やカリキュラムデザインの参考資料を得るために遂行されることが多いため、そもそもそれほど広範な一般化を目指していないことが多い。本プロジェクトで構築を試みているデータベースは、静岡県内で規模や平均的学力水準において特異な環境ではなく典型性の高いと考えられるいくつかの高

校が指定され、データ収集が進められている。このようなサンプリング方法は、例えば日本の高校全体の代表性を必ずしも保証するものではない。しかし、指定された高校間の比較や先行研究での全く異なる地域の高校との比較を通して、地域に依存しない可能性のある学習者ニーズ、および本事業が対象とした地域特有にみられる傾向を示唆することができるかもしれない。また今後、本データベースは規模を拡大し、縦断的なデータも加えてパネルデータとして公開することが予定されている。現在で得られている横断的データを探索的に分析することで、今後のデータ構築の指針に対しても何らかの示唆的な視点が得られるはずである。

2. 分析の枠組み

2.1 調査概要

上記の通り、本研究は「中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法等に関する実証研究」のうち、静岡大学を中心とするプロジェクト (<http://fretss.shizuoka.ac.jp>) において収集されたデータベースの二次分析である。プロジェクトの対象校は静岡県教育委員会・静岡県総合教育センターの指定した、静岡県内の普通科高校2校と工業高校1校 ($n = 1652$)、および国立大学附属中学校3校 ($n = 1147$) である。中学は国立の附属中学校であり高校は公立高校なので、校種間に純粋な連続性があるわけではないが、これらの附属中学校の一般的な生徒が調査対象高校の一つへ進学することは珍しくはない。本データベースは、指定校の英語学習法や英語に関する興味・関心の実態を把握することを目的として、英語運用能力テストのスコア (GTEC) およびマークシート式・記述式のアンケートが収集され、そのデータが収録されている (執筆時点で入手可能な初年度の基礎統計的データは静岡大学、2017に収録されている)。本研究の分析対象となった6校のデータは以下の表1の通りである。

表1. 調査対象校の情報

		<i>n</i>	回収率
高等学校	A校	598	98.36
	B校	942	97.21
	C校	112	96.55
中学校	D校	358	99.44
	E校	453	95.17
	F校	336	94.65
全体		2799	96.90

2.2 分析方法

本研究が対象とするのは、上記の調査における2つの自由記述項目のうちの1つである「英語を使ってできるようになりたいことは何ですか」という設問である。この設問への回答に関してまず全体的な傾向を掴んだ後、マークシートで収集された学習者データの中から「所属高校」、「英語力」、および「学年」のデータを使い、これらの要因によって自由記述項目への回答がどのように変化するのかを分析する。

3. 結果と考察

3.1 データ全体の特徴

データセットの記述統計を表1に、アンケートに出現する語彙の頻度リストを表2に示す。一見して、出現頻度の上位に出現する語は、中学・高校ともに似通っていることがわかる。上位の英語・外国・海外などは特筆するまでもないが、次点の第4位には「会話」、第6位には「コミュニケーション」が挙がっている。技能に着目すると、話すことの次点としては読むことが挙がっている。また、「仕事」という語句（記述された例としては、「海外で英語を使って仕事をしたい」、「英語を使って、国際的なかわりを持って仕事をしたい」など）も中高ともに頻度が高く、中学・高校といった学校種にかかわらず生徒は仕事と英語を結び付けたニーズを持ちうる可能性が示唆される。

表1. 各データセットの記述統計

	中学	高校	全体
有効回答の行数	1,046	1,305	2,351
総抽出語数	13,801	16,898	30,699
うち分析に使用された総語数	6,185	7,623	13,808
異なり語数	1,015	852	1,376
うち分析に使用された異なり語数	816	689	1,127

表2. 中学・高校・全体の語彙出現頻度リスト（上位20語）

順位	全体		中学		高校	
	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
1	英語	1077	英語	492	英語	585
2	外国	835	外国	407	海外	521
3	海外	826	海外	305	外国	428
4	会話	543	会話	200	会話	343
5	旅行	417	人	189	旅行	274
6	人	409	旅行	143	人	220
7	コミュニケーション	340	コミュニケーション	138	コミュニケーション	202
8	行く	252	話せる	115	行く	155
9	話せる	236	行く	97	話せる	121
10	話す	164	話す	81	日常	118
11	日常	162	読める	55	話す	83
12	使う	121	使う	50	使う	71
13	読める	118	日常	44	スムーズ	63
14	スムーズ	100	本	43	読める	63
15	日本	95	スムーズ	37	日本	59
16	現地	85	現地	37	困る	52
17	行う	79	日本	36	行う	50
18	困る	77	自分	33	現地	48
19	仕事	72	仕事	32	仕事	40
20	自分	71	普通	32	理解	39

3.2 学年によるニーズの特徴

次に、中学・高校の校種だけでなくそれぞれの学年も考慮し、さらに細かく特徴を探っていく。その際、上述の頻度上位20語だけでなくさらに広範のデータ（10回以上の頻度を持つ語）を分析に含めるが、頻度表の提示のみでも情報が膨大になるため、傾向を視覚的に把握するために対応分析を用いた。

以下の図1は、学校種を分けずに対応分析を行った結果である。JHSは中学生、HSは高校生をそれぞれ表し、その後ろの数字は学年を示している。この図では、回答傾向が近い語同士が近い位置に配置される。また、原点付近には特徴的ではない語（この場合校種や学年にかかわらず解答される傾向がある語）が位置する。

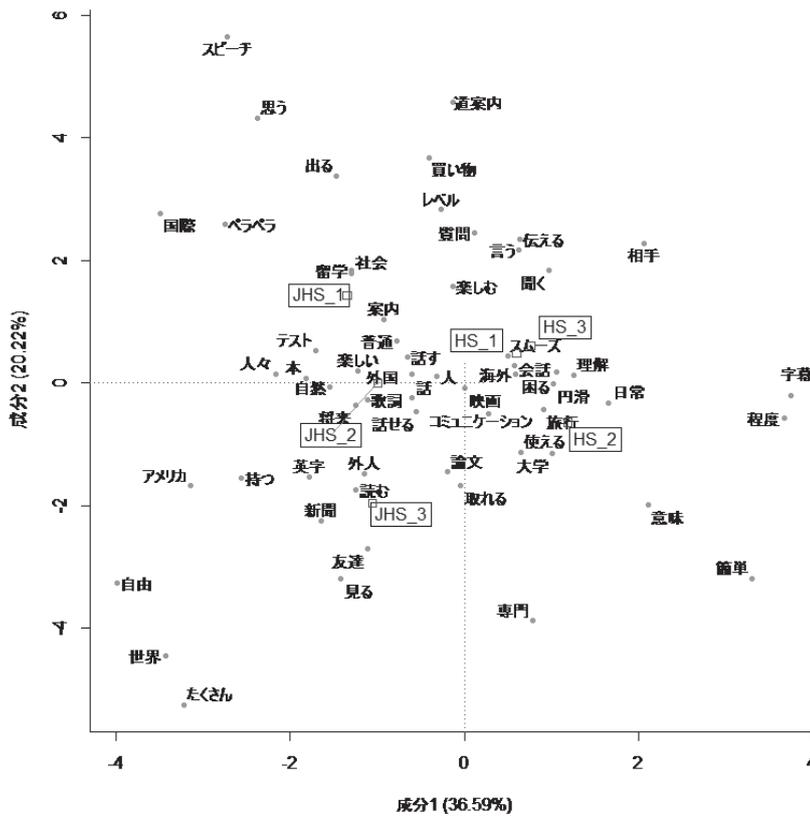


図1. 中学生と高校生を併せた結果（最小出現数10）

図1は、横軸でおおむね学校種が分かれ、縦軸は学年の違いによって配置されているように見える。原点付近には「海外」や「人」（「外国人」や「外人」という語から取られたもの）といった語だけでなく、やはり「会話」や「コミュニケーション」が位置しており、どのような学年・校種でもニーズとして一般的であることがうかがえる。また、高校生の側に「大学」、中学生の側に「テスト」という、進学や試験にかかわる語が位置する。

続いて、データセットを学校種別に分け、さらに詳細に各校種内の学年による変化を検討した。以下の図2は中学生の学年ごとの結果である。

語が登場することも多い。つまり、海外留学をしたいという動機づけが具現化した一形態として「海外の大学」で学びたいという希望があり、そのことがこの結果に表れているのではないかと考えられる。このことは、同じく中学三年生に特徴的に出現する「世界」や「現地」といった言葉からも推察される。

全体として中学生の主観的ニーズは、自らの経験を深め視野を広げるという意味での「国際理解としての英語使用」成分と、様々なメディアを通じた授業内外での「楽しみとしての英語使用」成分で構成され、一部が論文や留学といった専門的なニーズを持つに至っていると言える。

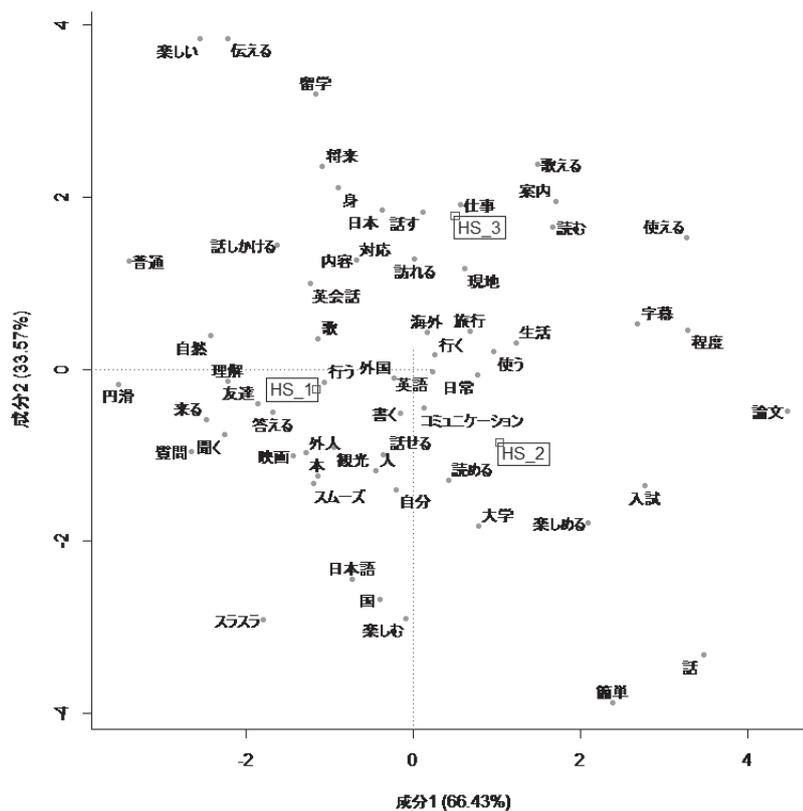


図3. 高校生の結果（最小出現数10）

次に、高校生の結果をみていく（図3）。高校生のニーズを表現する際に一般的な言葉としては、中学生と同じく「英語」、「外国」、「コミュニケーション」などが挙がる。ただし中学生とは異なり、「話す」や「会話」より「書く」の語のほうが典型的な語として中心に位置している。

一年生を見ると、「外国人と英語でコミュニケーションをとり、友達になる」「海外の人と話せるようになって友達になりたい」などといった文に現れる「友達」という語や「外国人に道を尋ねられたときに、答えることができるようになりたい」「外国人に道を尋ねられたときに、答えることができるようになりたい」のような具体的なコミュニケーション状況を示す際に用いられる「答える」という語が特徴的な語として位置している。これらの語がなぜ高校一年生に典型的なのかは解釈が難しいが、両校種・全学年で見ると高校一年生はちょうど年齢的に中心に位置する学年であり、中学・高校を併せた結果（図1）を見ても、高校一年生自体が図の

原点付近に位置している。そのため、これらの語が高校一年生に特徴的というより、最も特徴的な語が出にくいのが高校一年生であるといえるかもしれない。中学三年生も同様に学年としては中心に位置するが、中学校は高校入試という大きなイベントを控えている一方、高校一年生は入試をちょうど終えた時期であり、大学入試までも時間があるため、英語習熟度の向上、目標設定などに関する意識が希薄になっているのではないかと推測される。

高校二年生に特徴的な語としてはまず、「読める」という語が目にとまる。具体的には、「海外の本を読めるようになりたい」、「英語の本を読めるようになりたい」、「英語で書かれた論文などの文章を読めるようになりたい」、「英字新聞を読めるようになりたい」といった文に現れる。読む対象は上記のようにさまざまであるが、読解リテラシー能力を高めたいというニーズが高校二年生に強まる傾向がみられる。また意外なことに、「大学」「入試」という語は、高校三年生ではなく二年生に最も特徴的な語として挙がる。また中学生とは異なり、高校二年生が「大学」という語を用いた場合は、ほとんどの場合「大学入試」、「大学センター試験」、「大学受験」といった、入試そのものにかかわる言及である。一方、高校三年生が「大学」という語を用いた場合、「大学で論文を書く時に、英語で書かれた本を何冊も読むことができるようになりたい」、「大学生になって海外のレポートを読むときに、レポートの内容を正確に理解できるようにになりたい」、「大学で必要な論文などを書いたり、読んだりできるようにになりたい」などといった、入試ではなく大学入学後の英語使用にかかわる内容が書かれているケースがしばしばみられる。高校一年生の結果と合わせて高校全体の記述内容の変化を見ると、高校生が徐々に学習対象としての英語と自身が必要だと想定する現実の英語使用を結び付けていく過程がここに現れていると解釈できる。これは生徒が自発的に意識を高めた結果であるか、教師が意識を高めようと介入をはじめからであるのかはわからないが、少なくとも入試を目前に控えた高校三年生の生徒たちよりも、入試を次年度に控えた高校二年生のほうが入試を意識した英語力を求めるという傾向は特筆に値する。

高校三年生に関して、先述の「大学」に関する言及の二年生との質的な相違は、直観とは異なる大きな特徴の一つといえるが、「話す」、「読む」といった技能的な言及もみられる。特に高校三年生が「読む」ことを求める対象はそのほとんどが「論文」、「新聞」、「レポート」といった高いリテラシー能力が求められるものであることが特徴的である。また、「仕事」という語が高校三年生の付近に位置していることも特徴的である。

全体として高校生の主観的ニーズは、中学生より具体的かつ専門性の増した「リテラシーとしての英語使用」成分と、その楽しみを典型的なものというよりは特異的なものとして含みながら、生活上・進路上の必要性に応じた「対人インタラクションのための英語使用」成分とで構成されていると把握することができよう。

ただし、これらの結果は学年が決定的な要因になっているというより、英語習熟度に伴って変化するものもあるかもしれない。この点を考慮して解釈を行うために、GTECのスコアが紐づけられているA校・B校の高校一年・二年生を抽出し、GTECのスコアに応じて付与されたCEFRスコア「A2以上 ($n = 510$)」と「A1 ($n = 263$)」に分類したうえで、共起ネットワーク分析を行った。図4は、頻度10以上、描画数60の指定で習熟度の変数と出現語の関連を描いた共起ネットワークである。変数と出現語を結ぶ破線が太いほど強い関連を表し、また円のサイズが頻度の多さを示している。

慮され、具体化され始めるものなのかもしれない。

表3. それぞれの学年における「仕事」に関する言及（ランダムに10件を抜粋）

<p>高校一年生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語を使って、海外でも仕事ができるようになったり、日本でも英語を使って仕事ができるようにしたい ・仕事で外国へ行っても大丈夫のように、英語を話せるようになりたい ・将来、仕事で海外へ行けたり、外国の人とコミュニケーションをとれるくらい話すがしたい ・将来、仕事で海外へ行けたり、外国の人とコミュニケーションをとれるくらい話すがしたい ・外国に行ったときに、スムーズに観光や仕事ができるようになりたい ・大人になってから、海外の人とお仕事をしたり、コミュニケーションがとれるようになりたいです ・仕事をするときに活用できるようになりたい ・将来仕事をする際に、外国の人とコミュニケーションを上手くとれるようになりたい ・将来、英語を使ってプレゼンをしたり、海外での仕事の際に現地の方とスムーズなコミュニケーションをとりたい ・海外での旅行や仕事に役立てたい ・英語を将来の仕事に生かしたい ・海外で仕事ができるようになりたい
<p>高校二年生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外で仕事をし、生活できる ・仕事で英語を使えるようになりたい ・日本だけにとどまらず、グローバルに仕事がしたい ・仕事をするときに困らないようになりたい ・外国人と一緒に仕事をする ・将来、医療に関わる仕事につきたいから、英語で書かれた書類、カルテなどをスラスラ読めるようになりたい ・外国人と仕事の内容などを英語で会話できるようになりたい ・海外の企業や研究所等で、英語話者と対等に仕事ができるようになりたい ・英語を使って仕事も含めた日常生活を行えるようになりたい ・英語を使った仕事につきたい
<p>高校三年生</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事で英語を使う ・海外で仕事ができるようになりたい ・英語を使って、将来外国人を相手に仕事がしたい ・英語で仕事がしたい ・仕事で英語を使えない人にならないこと ・英語を使って仕事をしたい ・将来の仕事に役立つようにしたい ・将来、空港関係の仕事へ生かせるようになりたい ・海外で、働くにあたり、英語を喋れるようになりたい ・仕事の幅を広げたい

表4. 習熟度別「仕事」に関する言及

A2以上グループ
<ul style="list-style-type: none"> ・英語を使って、海外でも仕事ができるようになったり、日本でも英語を使って仕事ができるようにしたい ・外国に行ったときに、スムーズに観光や仕事ができるようになりたい ・海外での旅行や仕事に役立てたい ・将来、読み書きや話すことを仕事で活用できるようにしたい ・仕事で英語を使えるようになりたい ・仕事をするときに困らないようになりたい ・将来、医療に関わる仕事につきたいから、英語で書かれた書類、カルテなどをスラスラ読めるようになりたい ・仕事をするときに活用できるようになりたい ・将来仕事をする際に、外国の人とコミュニケーションを上手くとれるようになりたい ・英語を将来の仕事に生かしたい ・海外に旅行や仕事で行くときに、海外の人と上手にコミュニケーションをとれるようになりたい ・海外で仕事をし、生活できる ・日本だけにとどまらず、グローバルに仕事がしたい ・外国人と一緒に仕事をする ・外国人と仕事の内容などを英語で会話できるようになりたい ・英語を使って仕事も含めた日常生活を行えるようになりたい ・将来、英語を使ってプレゼンをしたり、海外での仕事の際に現地の方とスムーズなコミュニケーションをとりたい ・海外で仕事ができるようになりたい ・海外の企業や研究所等で、英語話者と対等に仕事ができるようになりたい
A1グループ
<ul style="list-style-type: none"> ・大人になってから、海外の人とお仕事をしたり、コミュニケーションがとれるようになりたいです ・仕事で外国へ行っても大丈夫なように、英語を話せるようになりたい ・将来、仕事で海外へ行けたり、外国の人とコミュニケーションをとれるくらい話すがしたい

4. 結語

本研究は、中学生・高校生の英語使用のニーズを探ることを目的とし、自由記述アンケートの分析を行った。分析の結果、まず先行研究で述べられているように、英語を用いたコミュニケーションのニーズはどのような学校種・学年でも見られることが示された。一方で、先行研究の多肢選択アンケートにおいて一貫して認められていた、入試にかかわる強い英語ニーズは本分析においては確認されなかった。このような結果の齟齬が生まれた一つ目の理由としては、先行研究における多肢選択アンケートの限界が挙げられる。日本における高校生の現状からみて、例えば「海外に留学する」ことより、「大学入試を受験する」ことのほうが、高校生はより喫緊の身近な課題として捉えるだろう。そのような状況で「大学入試が突破できる英語力を身につけたいか」と尋ねられれば、そこに肯定的な回答が集まることは想像に難くない。一方、研究者が事前に選択肢を与えない自由記述アンケートを分析した本研究が示唆したことは、生徒自身は必ずしも入試そのものを英語ニーズの「目標到達地点」ととらえているわけではないということである。つまり、生徒らにとって入試とは大きなイベントかもしれないが、生徒ら

の英語ニーズは実に多様であり、入試のニーズはその一部に過ぎないのである。さらにニーズとして大学入試に関連する語を挙げた生徒たちにとっても、その背後には、高い能力を身に着け、その上で多様な経験をしたいという、入試を超えた長期的視野に立つ英語ニーズが垣間見られた。授業実践者にとってこのことは念頭に置いておきたい重要な結果であるといえる。

また本研究は、学年によって高めたい能力の側面が異なるということのみならず、そのニーズ自体が自身のもつ能力、さらには自身の置かれている状況に敏感に影響される様を示した。本研究はあくまで代表性の高いと考えられる学校を対象にした学校種・学年別のみを対象にした分析であり、上記のような学習者の内的・外的要因の影響、およびその相互作用を十分に描いているとは言い難い。今後はさらに英語教育を社会の中に位置づけ、特定の社会環境・文化で、特定の特徴をもつ生徒を対象にして、どのようにニーズが移り変わっていくかを調査することで、より深い洞察を得ることができるだろう。

5. 引用文献

- 大木俊英 (2005) 「テキストマイニングを用いた高校生英語学習者のニーズ分析：大学受験予定者と非予定者の比較」白鷗大学論集第29巻第1・2併合号
- 静岡大学 (2017) 『文部科学省委託事業「英語教育の抜本的改善のための指導方法等に関する実証研究」平成28年度報告書』
- 寺沢拓敬 (2015) 『「日本人と英語」の社会学：なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』東京：研究社
- 永倉由里 (2006) 「英語教育の目的は何か—中学・高校・大学の生徒・学生と教師へのアンケート調査から—」犬塚章夫・三浦孝 (編著) 『英語コミュニケーション活動と人間形成』(pp. 55-66) 東京：成美堂